

# 課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号 18DC1604  
氏 名 ( 本 籍 ) 何 天 平 ( 中 国 )  
学 位 の 種 類 博 士 ( 学 術 )  
報 告 番 号 甲 第 120 号  
学 位 授 与 年 月 日 2022 ( 令 和 4 ) 年 3 月 20 日  
学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当  
論 文 題 目 上 世 紀 80 年 代 中 国 電 視 文 化 研 究

審 查 委 員 主 査 黄 英 哲  
副 査 唐 燕 霞  
副 査 松 岡 正 子



2022 ( 令 和 4 ) 年 2 月 16 日  
愛 知 大 学 大 学 院 中 国 研 究 科

## 審査の結果の要旨

題目：上世紀 80 年代中国電視文化研究

【審査結果】何天平の博士学位請求論文について、博士学位授与を相当とする

### 【審査要旨】

本博士論文の研究では、1980 年代の中国のテレビ文化に焦点を当て、新文化史の解釈の枠組を基に、文化研究と生活世界研究の方法を結合させ、改革開放後の 1980 年代における中国のテレビ発展の文化史について考察しており、特に特定の社会歴史背景におけるテレビ文化と社会文化の相互構築関係に注目している。メディア研究と文化研究を交差させた視点でテレビ史をふり返り、テレビ文化とその社会的影響について歴史的流れに重点を置いて分析を試みており、従来の研究方法のようなテレビを伝播構造や政治経済構造からとらえたメディア機能史の考察ではない。

### 1. 本博士論文の内容

論文は九章に分かれる。第一章は序論として、本テーマ選択の発端と既存の研究成果について述べ、研究設計等の基本的状況を紹介し、80 年代中国のテレビ文化を考察することの価値を明らかにしている。

第二章では、社会背景と文化背景の面から、80 年代の文化及び文化生産の特徴を整理した。特に 80 年代のテレビ文化において、中国社会の文化背景と世界的文化背景との差異的特徴を明らかにした。

第三章では、テレビの物質的な観点から、80 年代にテレビ文化がいかに社会生活に入り込んだかを考察し、テレビ文化が 80 年代に作り上げた文化的特徴を明らかにした。人々のテレビを重視する程度は伝達道具としての見方を超えており、さらにテレビにかかる時間への関心が生活のリズムに一定の影響を及ぼしたとする。

第四章では、80 年代のテレビ文化形成について考察し、中国において「テレビを見る」という新しい生活スタイルが出現したことを明らかにした。人々の日常生活の娯楽に直接影響し、テレビと「テレビを見る」という儀式が、国家や民族共同体意識のアピールとしてのテレビ文化を強化したとする。

第五章では、テレビ従事者、視聴者、批評家の三つの視点を通して、80 年代のテレビ文化の主要構成を分析している。80 年代にテレビ文化がどのように起きたかを明らかにした。

第六章では、80 年代の「文化としてのテレビ」に着目し、「文化ブーム」「美学ブーム」「西洋ブーム」のなかで、テレビ文化が反省と超越を通して、いかに自身の文化的主体性の確立を実現したかを明らかにした。

第七章では、80 年代のテレビ文化に含まれる現代性の要素について重点的に検討している。記録主義の人文精神、エリート主義の美学意識、集団主義の愛国精神が、80 年代中国のテレビ文化に現代的な言説を作り出し、これを基に啓蒙精神や開放意識が促されたことにより、テレビ文化が社会構造の重要なメカニズムに組み込まれていったとする。

第八章では、意識形態、流行文化、現代化の三つの言説の面から、80 年代のテレビ文化がいかに

社会的言説の構築と生産に影響したかを導き出している。あわせて 80 年代のテレビと、社会制御、消費主義、現代化の過程との間の相互関係に着目している。

第九章は結論として、まず 80 年代のテレビ文化と視聴者の間に築かれた特殊な関係を指摘する。大衆のテレビに対する興味は強く、雅俗に関わらず日常の余暇を埋めるのに不可欠な要素であるが、一方で、テレビ文化への要求も高く、洗練された内容から外れた「逸脱した」内容には、視聴者の厳しい批判を受けることになる。このような状況で、この時期独自のテレビ文化が促され、特有のテレビ世代も生み出すこととなった。人々は「テレビはいかにあるべきか」を重視し、思想や文明に関するより多くの意義をテレビに与え、同様にこれを基準にしてテレビを理解した。彼らは「視聴者はいかにあるべきか」には関心がないものの、自身も文化実践の過程において十分な啓発を受けた。80 年代の「文化としてのテレビ」の状況は、中国のテレビ発展の道程において、希少な輝かしい時代となった。このような突出した状況は、市場化の波が進む 90 年代では再現することは難しいようである。

## 2. 本博士論文の研究意義

一、伝統的な視点でのテレビ(史)研究では、主にマクロ政治経済の変革を背景に、国家の通信システムの枠組において、テレビ及びメディア技術体系が社会生産に重要な影響を与えることについて説明している。また、「国民的メディア」としての地位を得たテレビは、新聞、映画、文学などにくらべて、メディアとしての特殊な機能属性を持っており、特にその文化と大衆の日常生活が組み合わさり、独特な社会的作用があらわれた。いかにしてテレビはふさわしい社会文化を生み出し、大衆はテレビ文化を受け入れたかについて、それぞれ異なる解釈方法がなされているが、いずれもテレビ文化の次元からテレビの社会的機能構築の重要な流れをつかむものであり、これは研究の重要な意義の一つともなっている。テレビ文化のメディアでの実践がいかにテレビの「国民性」を育んだか。文化は非制度的な力で、いかにテレビ主流化の道を推し進めたのか。このことはテレビメディア変遷の理解に新しい視点を提供している。

二、今までの中国の 80 年代の文化研究の対象は、多くが文学、絵画、戯劇等の上位の文化に集中しており、通俗性、大衆性の文化形式に対するものは限られる。特にこの時期に盛んになったテレビは、市民の意向と通俗的な文化様式に寄り添うことで、80 年代の流れのなかでは両極端な評価を受けた。かつて上位文化に「反抗するもの」と見なされたテレビは、中国人の日常の生活スタイルに影響をあたえるとともに、80 年代末までには文化生活及び家庭生活の中心へと入り込んだが、これについては全面的な見直しが必要であり、日常生活に浸透したテレビ文化は、80 年代の文化観念と似ているようで異なる。このことはあらためて 80 年代のテレビ文化を検討するのに必要な研究意義をもたらしている。テレビ文化の流れを明らかにするために、より多元的な研究材料を提供するだけでなく、80 年代の文化研究の版図を豊富にするため、別の視点による解釈を提供している。

三、新文化史では、「人」の歴史とその背後の創造力を重視する。個人の生活経験を掘り起こし、主に個人史、心性史の中の底辺の物語を纏めることに注力する。新文化史の解釈の枠組でテレビ文化史を振り返り、テレビ文化を構成する「人」の歴史に注目し、伝統的なテレビ史研究に対する補足と展開の一助となっており、また別の研究意義を形成している。

### 3. 本博士論文の斬新な点

一、研究の視点について、80年代の文化研究が上位の文化に注目するのに比べて、同時期の大衆文化の意識と観念についての考察は、学术界では相対的に欠如している。テレビはこの社会歴史段階で最も迅速に成長し、同時にまた最も有意義で普遍的な大衆文化を持ち、社会(文化)との相互作用の過程において、徐々に自身の文化生産のメカニズムを形成していったとする解釈は80年代の文化意識と観念に一つの新しい視点を提供している。同時に、メディア研究の面から見ると、既存の研究は多くが市場化と国際化の成熟期におけるメディア機能の構築に注目するのに対して、成長期の進展全般に対する考察は少ない。80年代における中国のテレビ史をふり返り、研究面においてテレビとその文化の勃興をより把握するのに貢献しただけでなく、メディア(史)研究に全く新しい視点を提供している。

二、研究方法の面では、文化研究と生活世界研究の二つの方法に着目し、これらを交差させた視点で80年代の中国テレビ文化を考察している。研究全体は文化研究の基本的文脈を基に、特に背景としての80年代の社会描写及びその文化意識が、研究テーマに構造的な影響を与えるとして重視している。一方で、80年代の文化研究には対象、次元の構造において既存の研究の伝統が存在するが、文化に対する関心でその影響が減ることは考察の重点ではない。しかし、本研究では生活世界研究やエスノメソドロジーを結びつけて運用することで、これに対する補足としており、テレビ文化研究のこうしたテーマに対する解釈にも適合性をもたらしている。

三、学術貢献の面では、新文化史の解釈の枠組を借りてテレビ文化史を振り返り、メディア研究と文化研究の二つの面における学術革新を模索し、既存のテレビ史研究の版図を広げた。学界の中国のテレビ史についての考察は、多くが編年史の体裁を取り、帰納的であると同時に構成不足の紋切り型になっている。しかし新文化史の模範は、史料と史実の背後に潜む文化ロジックの探索にあり、より解釈史としての枠組があらわれている。歴史を描述するために歴史をあらためて解釈している。また一方で、「人」を主体とする微視的文化の叙述を展開している。視聴者に歓迎されることを主旨とするテレビ文化の表現は結局「大衆化」である。日常生活におけるテレビの文化実践が、テレビ文化を把握する上で重要な手懸りとなることを考察しており、これは個体の実践的経験が発揮されて大きく作用することを意味する。そのため史料処理の面においては、80年代中国のテレビ文化に関する文献、データ、公文書、音源映像資料等の客観的な史料を取り上げて研究するほか、更に主観的史料の発掘、すなわち個人史、心性史の発掘を重視している。民間の言説は80年代の文化研究を補足しており、学術貢献の面においても独創的な研究である。

### 4. 口頭試問において主査・副査から大要以下のような指摘があった。

2022年1月24日(月)何天平本人に対するオンライン口頭試問を、愛知大学名古屋校舎M2001会議室において主査黄英哲・副査松岡正子・唐燕霞・計三名によって行い、大要以下のような指摘があった。本博士論文は80年代の中国のテレビ文化に焦点を当て、当時人々がテレビ文化をどのように受け止めたかについて研究しており、筆者が主に利用した史料は当時流行していた新聞や専門雑誌上の「読者来信(読者だより)」であり、そこから当時の人々がどのようにテレビ文化を見ていたかを探り出している。しかし、この方法は限定的であり、地域的な制限があるほか、当時新聞や雑誌に投書

できたのは大体がエリート層であり、一般視聴者の視点が欠如しているという知識の程度による制限もある。そこで、人類学と社会学の方法を応用してより広範な取材をすることによって、紙媒体の史料の不足を補足することが可能なのではないだろうか。なぜなら、当時の一般視聴者は、現在の 50 歳代以上の者であり、当時の自分たちが受けた影響を鮮明に覚えているからである。

いかに史料の不足を補い、また研究上の困難を克服するかが、今後筆者が努力すべき点である。また、論文中、たとえば、都市と郷村を比較する視野、中国と国外を比較する視野が欠けているため、この点をさらに強化すべきである。対象とする時期ももう少し長くすべきである。80 年代の中国の文化開放程度についてもさらに強化して論じる必要がある。

本論文は、以上の指摘のように不十分な点はあるものの、課程博士学位請求論文として一定の水準に到達していると判断できる。口頭試問当日は、主査・副査による質疑に対しても、適切に応答した。よって審査委員会は本論文を博士学位授与に値すると判断した。